

麻布米軍基地跡地ミュージアム

ーアジアにおける日本統治時代の記憶ー



DZ18190 松本拓海

Keywords

米軍基地 平和教育 太平洋戦争 記憶

1. はじめに

1.1 研究目的

終戦から今年で77年が経過し戦争体験者の高齢化、減少により戦争の記憶が風化されつつある。戦争には加害と被害の歴史があるが、日本では学校教育のカリキュラムによって被害の歴史が重視される傾向があり、平和教育の客観性に欠けると考える。今後、戦争体験者がいなくなる社会で私たちのような戦争体験者から話を聞くことができた最後の世代が後世にどのようにして戦争の記憶を継承していくか、また様々な思想によって批判が起こる戦時中の加害行為についての展示手法を提案する。

2. 研究背景

2.1 戦争体験者の高齢化

総務省によると戦前生まれの人口は2019年10月で1962万人であり、1947年の7384万人から約4分の1に減少した。戦争を体験した世代の平均年齢は81.8歳と高齢化も進んでいる。また旧軍人恩給を受給した人口は9500人で戦地の悲惨さを直接知る人はかなり減少した。

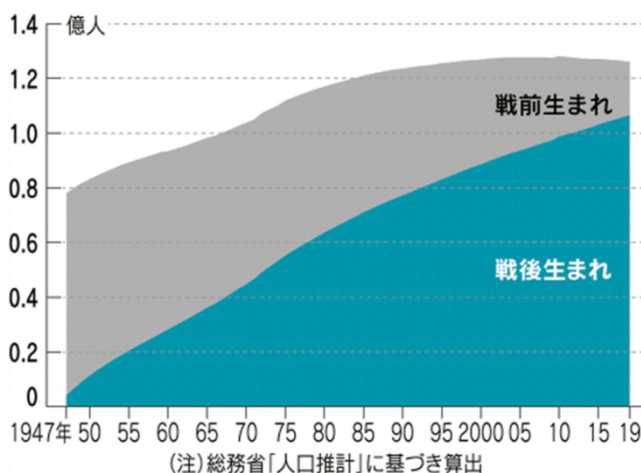


図1 戦前・戦後生まれの人口分布

2.2 記憶の風化

2015年にNHKが行った原爆意識調査において、広島に原爆投された日付の正答率は広島市、長崎市では過

半数が正答したが、全国の正答率は約3割である。正確に解答することが出来た広島市民の割合を時系列でみると、1980年80%、1995年77%、2005年74%、2015年68%と減少し、記憶の風化が進んでいることは明らかである。

表1 原爆意識調査

	広島市	長崎市	全国
1945年8月6日	68.6%	50.2%	29.5%
上記以外の日	21.4%	25.0%	28.1%
無回答	10.0%	24.8%	42.4%

2015NHK原爆意識調査（広島、長崎、全国）より作成

2.3 平和教育の客観性

日本で継承されてきた戦争体験は市民の戦争被害が中心である。これは歴史教育の学習指導要領と検定教科書の分配・配列に起因し、広島・長崎の被爆、沖縄戦、都市空襲、学童疎開などが焦点化されることが多い。戦争に関する博物館でも展示の内容は被害の歴史が主である。

2.4 加害展示の自粛

各地の平和博物館では、旧日本軍による「加害」行為についての展示が自虐的であるという批判から、展示を縮小、自粛せざるを得ない状況にある。あいちトリエンナーレ2019内の企画展「表現の不自由展・その後」が抗議・脅迫により三日間で中止となった。

3 調査

3.1 歴史認識問題

20世紀前半に日本が帝国主義のもと、アジア諸国を武力的に植民地支配した。戦後76年経過した現在でも、支配を受けた主に中国、韓国から戦争責任を問われ続け、領土、外交問題の火種となる。

3.2 大東亜共栄圏構想

日本は太平洋戦争以前からの植民地である満洲国、朝鮮、台湾のみならず、欧米諸国に植民地支配されていたアジア諸国の解放と日本の資源の獲得を目標とした大東

亜共栄圏構想を掲げた。

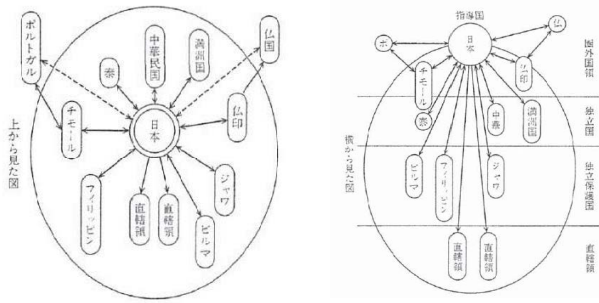


図2 海軍調査課「大東亜共栄論」(一九四二年九月)

3.3 現在の戦争博物館の展示手法

019年に展示のリニューアルが行われた広島平和記念資料館本館では実物資料での展示を方針と、暗い空間に展示物をスポットライトで焦点化することによって来場者が実物資料、キャプションをより注意深く見ることを可能にする。

4 設計敷地

4.1 敷地概要

敷地は東京都港区の麻布米軍基地と国立新美術館に挟まれる空き地とする。戦時中は陸軍歩兵第三聯隊兵舎として使用され(図3左上)、戦後米軍に接収された(図3右上)。環状3号線六本木トンネルの工事に伴い、米軍基地内が工事用地になったため隣接する青山公園の一部を臨時ヘリポートとして整備をしたが(図3左下)、工事完了後の現在でも返還が行われず、代替地として一部土地が返還された(図3右下)。現在、返還された代替地は空き地となっている。また臨時ヘリポートの整備によって青山公園内の通路はフェンスによって途絶えている。



図3 敷地変遷図



写真1 敷地周辺図

5 提案

5.1 プログラム

・展示空間 ・資料室 ・映像室 ・研修室 ・企画展示室

5.2 設計趣旨

従来の戦争博物館のようにガラスケース内に遺留品を置き、写真やジオラマによって記憶を保存するのではなく、空間体験によって記憶を想起させることを計画し、博物館と慰霊碑の間に位置する建築を設計する。

5.3 ダイアグラム

日本が有する主観的な記憶を残す空間とアジア諸国が有する客観的な記憶を残す空間の間にヴォイドを挟む。来館者は主観的な記憶と客観的な記憶を行き来することでヴォイドの深さを知覚する

6 終わりに

私たちの平和教育は被害者性を重視し、客観性が乏しい。グローバル化が進む世界で歴史認識問題は様々な転轍を生む。私たちのような直接的に戦争を経験をしていない世代が戦争に対してどのように向き合うべきか考えていきたい。

参考文献

- 1) 戦後生まれ8割 戦争の記憶、令和に語り継ぐ
<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO62603010T10C20A8MM0000/> (最終閲覧日2022/01/27)
- 2) NHK: 原爆意識調査 (広島・長崎・全国) 2015.6
- 3) 高部優子・いとうたけひこ・杉田明宏・井上考代『テキストマイニングによる平和教育に関する文献調査 CiNiiにおける論文タイトルのテキストマイニング分析』2018
- 4) 2つの資料館、その「展示」が伝えるもの。小田原のどか評「広島平和祈念資料館」

設計趣旨

日本では戦争によって被害を受けた人たちを追悼するメモリアルが主流であるが、これらは弱者の立場からの被害者性が強調される。今回の提案では日本人の被害者性のみならず加害者性を組み込んだメモリアルを設計し、戦争の記憶を継承する。

ダイアグラム

ランドスケープ

米軍基地臨時ヘリポートの造成によって失われた青山公園の自然を代替返還地（敷地）に移植する。現在は壁によって分かれている国立新美術館アプローチと代替返還地が繋がるように整備し、広場として解放する。

建築スケールの挿入

造成した地中に建築スケールを埋め込む。地中にある空間を体感するために光を活用する。外観が見えない建築とすることで、訪れる人は光を頼りに建築内を進んでいく。

ヴォイド

主観的な記憶と客観的な記憶を保有する空間の間にヴォイドを挿入する。このヴォイドは日本とアジアの記憶が共有されてこなかった歴史認識のギャップを表す。訪れる人はヴォイドを介して二種の空間を行き来することで記憶のギャップの存在を知覚する。

